

## 一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会 基本理念

我々の使命は、新たな環境認識のもとに、  
人と自然との関係を科学的、芸術的に把握し、  
環境と調和・融合した新しい秩序づくりに積極的に挑戦することによって、  
安全で豊かな環境の創出、  
すなわち、「みどりの環境文化」の形成に寄与することです。

### 1

#### ランドスケープアーキテクチャーの専門家集団

我々は、日本におけるランドスケープアーキテクチャーの思想と技術を  
継承し、発展させるために組織された専門家集団です。

### 2

#### 新しい技術の開発と研鑽

我々は、来たるべき21世紀の社会に対する責任を十分認識し、  
技術の高度化と多様化に対応した新しい技術の開発と研鑽を推進し、  
技術競争の時代に対応します。

### 3

#### 社会的信頼を獲得

我々は、社会的倫理観のもとに、公正な技術競争を通し、  
内外の要請にも応えられる自立した職能として社会的信頼を獲得すべく行動します。

### 4

#### 開かれた技術団体

我々は、内外の関連技術者との交流を通して、協調関係を積極的に推進し、  
多様な価値観を内包する開かれた技術団体として広く展開します。

### 5

#### 魅力ある創造的職能

我々は、経営体質の向上と安定を図ることによって、魅力ある創造的職能として  
広く社会から信頼されることをめざします。

平成7年5月  
「新しい環境文化の創造 ―造園コンサルタントビジョン―」より



## 特集：2021年 ランドスケープコンサルタンツ 協会賞 [CLA賞]

### 最優秀賞

【設計部門】  
CO・MO・RE YOTSUYA (コモレ四谷) ランドスケープ計画 ..... 2

### 優秀賞

【設計部門】  
大熊町大原川地区復興拠点のランドスケープデザイン ..... 4

【設計部門】  
東京経済大学 新次郎池周辺整備 ..... 6

【設計部門】  
新宿中央公園 眺望のもり創出 ..... 8

【調査・計画部門】  
大島町メモリアル公園 ..... 10

【調査・計画部門】  
朝霞市シンボルロード  
緑の都市軸創生のための樹林保全活用調査・計画 ..... 12

【マネジメント部門】  
市民による公共空間の緑化推進～福岡市緑のコーディネーター～ ..... 14

特別賞 【設計部門】  
JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE ..... 16

奨励賞 【マネジメント部門】  
黒崎園地利用拠点計画策定支援業務 ..... 18

CLA賞の趣旨と募集・選考のあらまし ..... 19

2021年CLA賞 受賞技術者プロフィール ..... 20

#### [特集]

ランドスケープ整備・管理運営の新たな潮流において  
ランドスケープコンサルタンツに期待される役割 ..... 23

・勝山公園  
～全国で初めてPark-PFIを活用した北九州市のシンボル公園～  
北九州市建設局公園緑地部緑政課 ..... 24

・四季の郷公園が目指す《体験型サステナブルパーク》へ ..... 28

・泉南りんくう公園  
[愛称] SENNAN LONG PARKについて ..... 32

・稲毛海浜公園のリニューアル ..... 36

・神奈川県立観音崎公園 (たたら浜園地) における  
Park-PFI事業「BEACH⇄PARK LIVING」 ..... 40

・民間主導公民連携事業による BeBA TERRACE について  
Improvement of BeBA TERRACE  
in public private partnership project ..... 44

会員名簿 ..... 48

#### 表紙のPhoto Story

表紙デザインは、2021年CLA賞の  
受賞作品9点の写真をコラージュし  
たもので、都心の中心部から自然  
公園まで、そして緑の景から人々の  
集う姿まで、新たに創出した景から  
既存の緑の再整備まで、様々な写  
真が集まりました。  
人々の生活の質を高め、そのため  
の基盤としての緑の空間を保全・  
創造していくことがランドスケープと  
いう仕事です。これからも私たちの  
職能を社会にアピールし、より良い  
環境づくりに貢献していきましょう。



# 最優秀賞

設計部門



## 作品概要

作品名—— CO・MO・RE YOTSUYA(コモレ四谷) ランドスケープ計画  
 所在地—— 東京都新宿区四谷1-6-1~5  
 事業主—— 独立行政法人都市再生機構  
 設計—— プロジェクトマネジメント/独立行政法人都市再生機構  
 基本設計・デザインディレクション・工事監理:  
 日本設計・三菱地所設計共同企業体  
 実施設計: 大成建設一級建築士事務所  
 設計協力—— 景観照明: シリウスライティングオフィス  
 外構サイン: 乃村工芸社・ノムラプロダクツ  
 施工者—— 大成建設  
 設計期間—— 2014年9月~2016年8月  
 施工期間—— 2016年9月~2020年7月  
 規模—— 敷地面積 17,931.82㎡  
 主要施設—— 広場、ゆるやかな丘、芝生、植栽、水景(流れ)、ベンチ、サイン、屋上緑化、壁面緑化 他

## 作品評

本作品は、土地の高度利用と都市機能の集積を目的とする東京都心の大規模市街地再開発事業での、複合用途建築物と一体化した緑豊かな空間づくりを目指したランドスケープ計画である。  
 この事業では、商業・公益・教育・住宅施設で構成される四谷の多機能拠点づくりとともに、四谷駅周辺市街地の抱える賑わい交流の場づくり、防災機能の強化、良好な街並み形成、歴史遺産の継承等の様々な都市課題改善の役割が求められており、それだけにランドスケープの力量が大きく問われる業務であったといえる。  
 応募者は、これらの計画課題に対して、建築と一体化したステップガーデンによる緑の丘の創出、防災拠点機能を有する開放的な広場の設置、街路の緑とつながる快適な歩行空間の創出などを提案・計画し、建築と緑が融合した秀逸なランドスケープ空間を実現している。  
 また、提出資料についても、地域特性の把握からランドスケープコンセプトの設定、植栽計画、ディティールプランの流れが、文章・図面・写真の組み合わせでわかりやすく説明されており、こうしたプレゼンテーション力を含む総合力が高く評価され最優秀賞となった。

設計部門



①三栄通り側 ②歴史サインと水景 ③出迎いの広場と外堀通り側 ④出土した間知石をゲートに活用

# CO・MO・RE YOTSUYA(コモレ四谷) ランドスケープ計画

### 株式会社三菱地所設計

津久井敦士・植田直樹・松尾教徳・西垣和真・多田裕樹(元社員)

### 株式会社日本設計

常盤純代

### 大成建設株式会社一級建築士事務所

山下剛史・小池 亘・神田祐樹

### 独立行政法人都市再生機構

大倉孝司・村尾 駿・森田修平

本計画は、四谷駅前初の超高層ビルを含む大規模再開発である。如何にしてこれを既存市街地と調和させるかが本事業の課題の一つであった。また、四谷の歴史、地域的特色からくる多様性を活かし、街の機能や人と結びつく緑豊かな空間の創出が求められたことを受け、計画地に由来するさまざまな特徴を丁寧に拾い上げ、場所に応じて性格の異なる空間を創出するランドスケープ計画とした。

### —コモレビの広場

外濠の谷の「人によってつくられた地形」を手掛かりに、外堀通りから建物低層部へとつながるゆるやかな丘を設けた。こ

の連続性に配慮し、計画地の内外をつなぐ道は切通しとした。

中心には、新たな憩いの場となる天然芝の広場を設け、それを囲む植栽は、外濠の緑とのつながりを意識し、雑木が主体の「武蔵野の杜」とした。尾根に沿って常緑樹を配し、樹冠の連続性により丘の形を強調しつつ、林縁には落葉樹を多く配して彩ある緑の景観を生み出している。

建物低層部のステップガーデンは、平面緑化に加えて、パラペット先端に、じゃこ緑化による立体的な緑化を行い、外濠からコモレビの広場を経て建物低層部へとダイナミックに連続する緑の景を創出している。

### —三栄通り側

江戸時代には玉川上水の樋管が埋設され、町人地の賑わいが

広がっていた記憶を継承し、直線の水路の設置、江戸園芸文化に触発された植栽や人の溜まりに配慮したベンチの配置など、歩きたくなる街路空間を創出した。

### —外堀通り側

外堀通りの大きなユリノキの街路樹と呼応させるように風環境にも配慮した常緑樹のタブノキ並木を配置。迎賓館から続くビスタ景に呼応する品格ある歩行空間を創出。

### —出迎いの広場

建物先端に空中庭園を設け、パサージュ(貫通路)の先に広がるコモレビの広場との繋がりを意識させる緑の顔出しを行った。



# 優 秀 賞

設計部門



①



②



③



④

## 作品概要

作品名——大熊町大川原地区復興拠点のランドスケープデザイン  
 所在地——福島県大熊町  
 発注——大熊町、UR都市機構(事業代行)、  
 中里・鹿島復旧・復興建設工事共同企業体(設計施工)  
 設計——株式会社ランドプランニング  
 設計協力——土木:栗原裕(故人)・志津充晃(有)ユー・プラネット  
 自然環境調査・計画:八色宏昌・湯本香織(景設計画株)  
 監理——UR都市機構  
 施工——中里・鹿島復旧・復興建設工事共同企業体(元請)  
 藤造園建設株式会社(造園工事)  
 設計期間——2018年1月~2019年5月  
 施工期間——2019年3月~2020年10月(造園工事)  
 規模——18.3ha  
 主要施設——役場新庁舎、復興公営住宅、商業施設、交流施設、  
 医療・福祉施設、教育施設

## 作品評

この作品は、東日本大震災被災地の復興拠点となる街づくりのランドスケープデザインであり、応募者は住宅地・水路・里山の基本設計と実施設計のデザイン監修に携わった。  
 住宅地については、住棟の間に設けられた水路や共有庭となる広場・歩行者専用路に対して、住宅敷地と公共空間の境界を感じさせないデザイン処理がなされており、建築とオープンスペースが一体化した居心地のよい居住空間を生み出している。  
 また、このプランの特色は、農業用水を住宅地内に引き込み、潤いのある水路空間を創出していることで、応募者の巧みなランドスケープデザインによって、現場発生材を用いた庭園風の流れと生物多様性の環境を持つ良好な水辺環境が形成されている。  
 この他、頭森公園周辺でのホテルの生息環境づくりや里山再生に向けた公園デザインにも取組んでおり、こうした点が評価されて優秀賞となったが、選考会では街区マスタープランとの関連性の説明がもう少し欲しかったという指摘があった。

設計部門



⑤



⑥



⑦

①庭先の庭園風の流れ(洲浜部) ②住宅の庭先と一体となった流れ ③住宅の共有の中庭となる広場 ④住宅地の全景 ⑤住宅地内道路のデザイン(道路の庭先化) ⑥コミュニティ農園 ⑦生物多様性のデザイン ⑧庭先の庭園風の流れ(洲浜部) ⑨落差工のデザイン(水音演出/生物移動)



⑧



⑨

# 大熊町大川原地区復興拠点のランドスケープデザイン

株式会社ランドプランニング 萩野一彦  
 株式会社プランニングネットワーク 友森千春  
 藤造園建設株式会社 石川重雄・友保容子

本業務は、東日本大震災原発事故によって帰還困難区域となった福島県大熊町大川原地区約18.3haに、町民が自然に包まれ安心して暮らせ、豊かなコミュニティを再生できる新しい街をつくることを目的としたランドスケープデザインである。①住宅地(街区マスタープラン、道路(舗装等)、広場、植栽デザイン)、②水路、③里山(生物多様性計画、公園等)の基本設計を行い、施工会社が行った実施設計のデザイン監修を行った。

## 大川原「相馬千年の街」“頭森の庭に暮らす街”をつくる

大川原地区は、復興に向けた長く粘り強い取り組み(戦い)の本陣である。ふるさとを思う町民にとって、いつかは戻りたいという気持ちを抱くことができ、素朴でありながら永久にあり続ける強さをもつことが必要。頭森と呼ばれる溜池と里山に囲まれ、相馬の時代から千年続くこの地に、これからの千年を見据える理念を持つことが重要である。このため、デザインテーマを以下のように設定し、基本設計を行った。

・色褪せない自然の素材(石、土、植栽、水)を使い素朴な親しみやすいデザイン

- ・大地と自然に守られた庭園を思わせるランドスケープ
- ・大地と自然の恵みを受けて暮らす営みのシステム

## 住宅地(復興公営住宅)のデザイン

コミュニティ形成を促す住環境のデザインが必要であったことから、コミュニティ道路やコミュニティ農園を提案しデザインした。

街区マスタープラン(道路線形、緑地配置、宅地割)では、建築のパートナーの役割を果たし、公営住宅建築(福島県及び学識者)との調整により設計を行った。また、道路デザインでは、短期での調整のため、舗装・排水施設・その他設備の土木基本設計を含めて行った。

## 水路のデザイン

下流の農地へ給水する農業用水路を地区内に引き込み、住宅地に潤いを与える親水空間とすることが求められた。これに加え、住宅の庭先に歩行者動線とともに「庭園のような流れ」を

つくり、ふるさとを感じる交流の場、コミュニティの場、生物多様性の場とすることをコンセプトに水路デザインを行った。土木の現場の中で庭園のデザインを実現するため、造園施工会社を実施設計・施工者とし、デザインを共有し的確な施工を行うための体制をつくり、施工までのデザイン監修にあたった。

## 公園における里山環境のデザイン

調査により確認されたホテルの生息は、地元出身者も初めて知り、ふるさとの自然への興味が高まった。このことから、自然・生物とのふれあいがコミュニティ形成につながることを念頭に、ホテルの生息環境をはじめとした生物多様性のデザインと育成プログラムを立案した。

## 未来に向けて(グリーンインフラとしての定着)

今後、グリーンインフラとしての定着に向けて、空間だけでなく自然・生物とのふれあいが大きな役割を果たし、次世代を担う子どもたちを育むことへの期待が広がる。



①

作品概要

作品名——東京経済大学 新次郎池周辺整備  
 所在地——東京都国分寺市  
 発注——東京経済大学総務部  
 設計——株式会社グラク  
 設計協力——(植栽設計)東光園緑化株式会社  
 (パーゴラ・ベンチデザイン)浅香信太郎デザイン室一級建築事務所  
 (擁壁設計)株式会社 企工社  
 監理——株式会社グラク  
 設計期間——2019年5月～2019年12月  
 施工期間——2020年2月～2020年10月  
 規模——約8,000㎡  
 主要施設——新次郎池、湧水口、パーゴラ、デッキ階段、スツール、案内施設等

作品評

本作品は、国分寺市に位置する大学キャンパス内に保全されてきた湧水池「新次郎池」と樹林「東経の森」の環境整備のために調査・設計を行った業務である。対象地が立地する国分寺崖線沿いには殿ヶ谷戸庭園やお鷹の道など歴史を感じる名所が多く、湧水と斜面樹林により水辺と緑の回廊を形成している。大学創立120周年記念事業である環境整備は、武蔵野台地に残る貴重な環境資源を活用して魅力的に再生し、大学内だけに留まらず広く訴求することが求められた。応募者は、水と緑の再生による大学と地域を結ぶ「縁結び」のコンセプトのもと、教職員や地元の人々を受け止めながら、水辺や森の再生を明快にデザインし、水辺や森がもたらす魅力を十分に発揮し、学生や来訪者が楽しむことができる空間づくりに成功している。国分寺崖線の歴史と文化の品格を感じる景観を形成し、後世に残していきたい水と緑の再生を実現した作品である。



② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧  
 ①大学と地域と結ぶ交流の場となる「新次郎池」まわりの水上デッキ ②東経の森への入口となる「森のリビング」  
 ③森と池を一望する「森の展望台」 ④斜面樹林を巡る「森の回廊」 ⑤木漏れ日のみち  
 ⑥⑦⑧多様な水の表情を見せる湧水口と落水、せせらぎ

# 東京経済大学 新次郎池周辺整備

株式会社グラク

北川明介・西山秀俊・岸井悠子・藤田芽衣

本プロジェクトは、東京経済大学が国分寺崖線の緑の回廊の一角をなす緑地として維持保全してきた湧水池「新次郎池」とその周辺の樹林「東経の森」を対象とし、大学創立120周年記念事業の主事業として進められた環境整備事業です。

整備設計にあたっては、対象緑地の課題解決、改善を図るだけでなく、自然との共存を掲げる大学の「エコキャンパス宣言」

を具現化し、記念事業として相応しい、次の時代へとつなぐ森に整備することが求められました。

これに応えるため、「東経の森」の水と緑を最大限生かした資源活用型の森づくりに取り組みました。

地域に開かれた交流の森づくり

【新次郎池】

「新次郎池」の名で、地域の人たちに親しまれてきた国分寺崖線固有の水・緑環境を活かし、大学の環境への思いを映す場として、そして大学と地域の人々との出会い、語らう交流の場「結の水広場」としてデザインしました。

【森の展望台】

学びの場であるキャンパスが依って立つ「森」を展望する特別な場所として「森の展望台」をデザインしました。

【森のリビング】

既存のモミジの大樹を中心に据えて、学生たちが集い、憩う屋外のリビング空間としました。このリビング端部には、森へのいざないを演出する縁側空間として斜面樹林に張出した木製デッキを設置しています。

多様性を楽しめる森づくり

斜面樹林の地形と植生を最大限残した空中デッキ「森の回廊」

や既存通路を再整備した「木漏れ日のみち」など、多様な森の表情を楽しめる散策路をつくり出しました。

五感を呼び起こす水辺のデザイン

新次郎池は、「東経の森」を象徴する唯一無二の環境であるとの認識のもと、地下水脈の存在を想起させる湧水や多様な表情を見せる池水面の景を最大限表出させ、感じさせることが重要と考えました。そこで、水の動きの強調、自然を映し出す水鏡づくり、聴覚を刺激するサウンドスケープの3つの視点から五感に訴えるデザインを進めました。



# 優 秀 賞

設計部門



## 作品概要

作品名——新宿中央公園 眺望のもり創出  
 所在地——新宿区西新宿二丁目11番  
 発注——新宿区  
 設計——株式会社グラック  
 設計協力——株式会社アーク設計事務所  
 施工——株式会社 昭和造園  
 設計期間——2019年7月～2020年3月  
 施工期間——2020年9月～2021年2月  
 規模——約7,200㎡  
 主要施設——眺望テラス、樹林広場、エントランス広場、散策路、休憩施設、滝のライトアップ施設 他

## 作品評

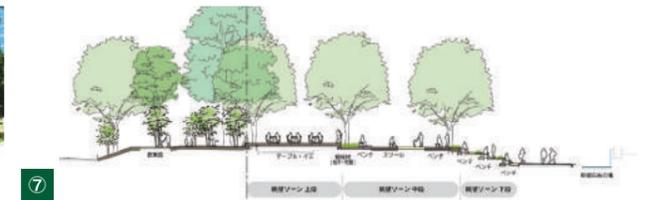
新宿中央公園は、西新宿の都庁をはじめとする超高層ビル群の一角にある緑豊かな新宿区有数の都市公園であり、公園内には多様なエリアが配置され、オフィスワーカーや親子連れなど多くの利用者に親しまれている。

一方で、「新宿中央公園魅力向上推進プラン」に基づき各エリアの再整備が進められているところでもあり、本作品も既存のポテンシャルを活かした魅力ある空間の再生が求められた。

応募者は、他エリアとの連続性や既存の地形・樹林・水景等の特性を丁寧に検討しながら、JR 新宿駅西口からの都市軸上の立地を意識した配置と動線の再構成を行い、国際観光都市・新宿の新たな名所となるダイナミックな眺望と夜間景観を楽しむ場をつくり出している。

再整備後は既に整備されたエリアとも相乗して、都会のオアシスらしい居心地良い空間となっており、昼夜問わず利用者が多いことが本作品の最高の評価になっていると言える。

設計部門



①眺望ゾーン中段 ②眺望ゾーン上段 ③眺望ゾーン上段からの夜景 ④計画対象地位置図 ⑤ゾーニング図  
 ⑥眺望ゾーン下段/開放的・対称的なデザインで上部の眺望ゾーンへの期待感を高める  
 ⑦眺望空間断面構成 ⑧南側エントランス/間口を大きく広げ迎え入れる  
 ⑨眺望空間と散策ゾーンをシームレスにつなぐ樹林広場 ⑩南側エントランスのウォールで憩う人々

## 新宿中央公園 眺望のもり創出

株式会社グラック

高橋彩・北川明介・田丸真菜（元社員）・植原睦美

「眺望のもり」は新宿区が策定した「新宿中央公園魅力向上推進プラン」（平成29年9月）において、ビル群への眺望を活かす空間として、早期実現を目指す取り組みのひとつに位置付けられていました。

計画地は新宿駅西口から延びる4号街路の都市軸の延長線上に位置し、街路の東西に立ち並ぶ高層ビルを眺めるビューポイントとなる十分なポテンシャルを持つ場であることから、ミッションである「眺望空間の創出」のため、2つの植栽帯を集約して一体的な空間とし、4号街路へと延びる景観軸を空間

構成軸として、軸線上に「白糸の滝ゾーン」「眺望ゾーン」「緑とふれあうゾーン」「散策ゾーン」を配置し、既存地形や既存植栽を活かしながら、場のポテンシャルを最大限に引き出す空間構造の組立てを行いました。

### 眺望空間の創出

滝前の園路側から計画地の中央部にかけて、現況地形を活かし、眺める対象・見え方、空間の設えが異なる3つの眺望空間（上段・中段・下段）を創出しました。

### シームレスにつながる空間デザイン

周囲の園路どこからでもスムーズに眺望のもりに迎え入れる動線計画としました。特にエントランスは周辺エリアからの接

続性を意識し、南側エントランスは大きく広げた間口の両側にゆるやかにカーブするウォールを立ち上げたデザイン、眺望ゾーン下段は開放的・対称的かつ上部の眺望ゾーンへの期待感を高めるデザインとしました。

眺める空間という明確な意図を持って直線的にデザインした眺望ゾーンと、既存の大径木に囲まれた自然度の高い曲線的にデザインした散策ゾーンをシームレスにつなぐ空間として樹林広場を配し、質の異なる空間がグラデーションのように違和感なく移行するデザインとしました。

### 賑わいと憩いを生むしかけ

【夜景を楽しむ場づくり】高層ビルの夜景との連続性を意識した白糸の滝の演出照明、眺望のもり自体も夜を楽しむ空間となる演出照明を行いました。

【好きな場所を選んで座れる憩いの場づくり】いたるところに座ることのできる場所を用意し、過ごし方、眺めたい景色、その日の気分などのシチュエーションに合わせて選べる場をつくりました。

【飲食が楽しめる憩いの場づくり】南側エントランスの広い間口空間を活用して、キッチンカーを停められるスペースを確保し飲食が楽しめる憩いの場づくりを行いました。



# 優 秀 賞

調査・計画部門



調査・計画部門

## 大島町メモリアル公園

### 東京ランドスケープ研究所

小林 新・尾崎友美・羽田泰章・鈴木憲明・栗下雅之・上田早織 (元社員)・梅原可奈子 (元社員)

### 公園マネジメント研究所

恵谷 真・長谷川利恵子・浦崎真一

計画地は平成 25 年 10 月の台風 26 号により土砂災害が発生し、死者 36 名行方不明者 3 名 (平成 26 年 7 月 31 日時点)の甚大な被害を被った区域でした。「鎮魂・災害の伝承」と「島の活性化」という二つの目標を「復興祈念」という骨太のテーマに基づきメモリアル公園を計画しました。

「直接的被害を受け復興に向けて思いをはせることが困難な方々」「鎮魂や祈り等を行う場にレクリエーション施設である公園づくりに反対されている方々」「災害により改変された土地や施設をそのままの形で残すべきと考えている方々」等様々

な思いや各世代での違った意見のある中、行政と住民が公園整備に向けたワークショップ形式の検討分科会やアンケート調査等を行いました。検討分科会では、ファシリテーターとして、土地の状況や法規制、景観特性、他公園の事例など、客観的な敷地特性と合わせ一つ一つ丁寧に説明し、意見の相違や課題事項を解決し、公園計画案として取りまとめました。

検討分科会では「鎮魂・祈りの場」「学びと伝承の場」「憩いと交流の場」「自然文化の場」の 4 つの空間構成とその整備内容についての検討を行いました。

「鎮魂・祈り」「学びと伝承」の視点では、災害の遺構を保全するのではなく、災害のあった 10 月にも咲く、二期咲き桜を住宅跡地や土砂の流出方向に対し植栽した景観軸を計画することで災害の記憶とし、鎮魂・祈りとなり、伝承につながる計画にしました。防災施設である導流堤や堆積工等が隣接している

### 作品概要

作品名—— 大島町メモリアル公園  
所在地—— 東京都大島町元町字神達及び宇木伏大道地内  
発注—— 東京都大島町  
計画—— 株式会社東京ランドスケープ研究所  
計画協力—— 株式会社公園マネジメント研究所  
計画期間—— 2015年6月～2017年3月  
規模—— 約6.7ha  
主要施設—— 慰霊碑・広場・管理棟・公園トイレ・遊戯施設・スケートボード場 他

### 作品評

2013年の台風 26 号は、東京島嶼部の大島町に甚大な土砂災害をもたらした。本作品は、復興を祈念する大島町立メモリアル公園を整備するために、町民意見の収集を図る検討分科会や小・中学生へのアンケートを実施して設計を行なった業務である。

ワークショップ形式の検討分科会では、多くの方々から積極的に意見が出され、その中で応募者は、相反する意見に向き合い丁寧に合意形成に努力している。さらに、参加した高校生達の思いが込められた提案を受け止めた施設の導入や、大島の大切な資源である椿、桜、三原山を取り込んでデザインするなど、被災した現地を遺構として残す形ではなく、記憶として残すという形で公園の在り方を打ち出している。

整備後も、参加者が積極的に管理・運営に関わっているような意欲を生む「未来志向の公園」として計画していることが高く評価された。災害跡地での計画としてモデルとなる特筆すべき事例である。



①全景 (三原山中腹より) ②折りの広場 ③メインエントランス  
④スポーツ広場 (スケートボード場) ⑤大島町メモリアル公園計画平面図 ⑥ふれあいの園  
⑦遊戯施設 (三原山の尾根線をイメージ) ⑧園名 (椿の花のモチーフ) ⑨遊戯施設 (三原山火口をイメージ)

ため、公園からのその防災施設へのアクセスや眺望を確保することで防災への学びにもつながる計画としました。

「憩いと交流」「自然文化」の視点では、大島で発見されたヤブツバキの選抜種などヤブツバキ系統を中心とした 12 品種のツバキをはじめ大島の固有種や準固有種を導入することで大島らしさを表現しました。特に観光客が減少する春と秋に見頃を迎える植栽を積極的に取り入れ、大島の新たな魅力創出に貢献し、集客につながる計画としました。

造成計画では、利用のしやすさや雨水の流出や防災面等にも配慮し、地形の改変を極力抑えながら、ひな壇状の造成計画とし、主要施設付近に駐車場を配置することでだれでも利用しやすい公園計画としました。

動線は、管理車両も通行可能な幹線園路を設け、幹線園路をつなぐ支線園路、支線園路をつなぐ細園路及び公園のシンボル

となる特殊園路の 4 種類の園路構成とし、公園の利用動線や維持管理動線等様々な用途に対応できる計画としました。

また、古く三原山への巡礼等大島の人々の生活に密着してきた旧登山道を活かすとともに、大島の歴史や自然や景観、四季の変化が楽しめる、回遊性のある園路計画としました。

導入施設は、大島らしさを表現する素材として「ツバキ」「サクラ」「三原山」をデザインモチーフとして取り入れた遊具や園名板等のほか、検討分科会に毎回参加していた、「公園が完成する頃には自分達は成人している。後輩のためにスケートボード場を整備し、公園に来るきっかけ作り、災害を思い起こすきっかけとしていきたい。自分たちが責任を持って管理やマナーの指導をしていく」と周囲の説得を行い実現したスケートボード場など、特徴ある施設計画を行い、多くの人々に利用されている公園が完成しました。



## 朝霞市シンボルロード 緑の都市軸創生のための樹林保全活用調査・計画

### 株式会社グラック

北川明介・高橋 彩・田丸真菜（元社員）

本プロジェクトの対象となった「朝霞市シンボルロード」は「米軍基地 キャンプ朝霞（CAMP DRAK）北地区」跡地に計画されている基地跡地公園の東側を南北に走る「公園通り」に沿った幅30mの帯状のエリアです。

シンボルロードは市庁舎前緑地・ケヤキの丘を起点として、南端の南口広場までの延長約800mに及ぶ広幅員の緑地帯の

中に、既存樹林を抜ける歩道空間（幅員3.6m）と市役所前広場、北口広場、中央広場そして南端の南口広場の4つの広場が計画されました。

本プロジェクトでは、敷地に残る現況樹林を最大限に生かした計画とするため、緻密な現況調査と分析に基づく、既存樹林の保全計画を提案しました。

### 提案1 現況植生調査・分析に基づく樹林保全活用計画

樹林全体は落葉広葉樹で構成されていましたが、詳細な調査と分析により、草地主体の植生から高密度な樹林までの密度の違いの他、樹種、樹高の違う多様な樹林の姿が浮かび上がって

きました。こうした現況樹林の特性把握、分析に加え、シンボルロードの空間整備計画に反映できるように、見どころとなる景観をつくり出している樹木や大径木を抽出し、既存樹林の保全活用計画を提案しました。

### 提案2 街の骨格となる緑の保全活用計画

シンボルロード整備区域内には、プラタナスやイチョウなど巨木化した樹木、ヤマザクラの大木など、巨木・大木が多く見られたため、緑の骨格形成を目指し基地時代の面影を残す巨木・大木の保全活用を第一優先とした整備計画を進めました。

### 作品評

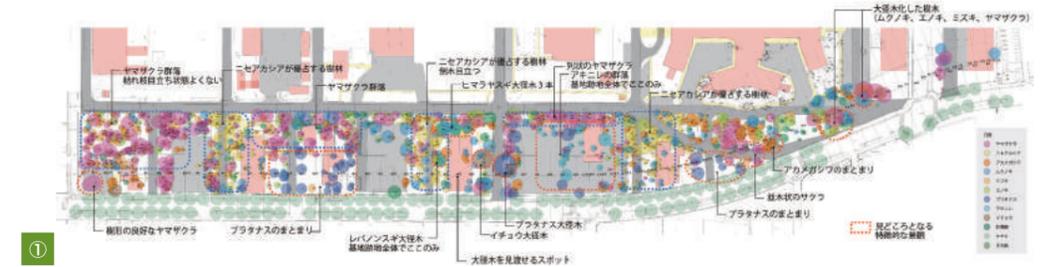
2.4haの敷地に広がる樹林地の現地調査と分析を行って、既存樹林・特性を保存活用した緑の都市軸となる森づくりに取り組んだ。「ゆっくりと歩ける歩行空間、大小さまざまなイベントを開催できる広場、くつろげる緑陰」をコンセプトにして、保存伐採計画を立案して、街の骨格となる緑のデザインを提案した。

同時に、市民参加による「シンボルロードの管理運営を考える会議」の運営・支援を行っている。地道な調査と分析、保存・景観・利用の総合的な検討に基づいた提案は、市民・自治体担当者にとって、説得力のある確かな情報となったであろう。事業推進に大いに貢献している。

基本計画段階での、「使いながらつくる、つくりながら考える」という考え方を貫いている。樹木は数百年の寿命を持つ生きものである。「すべてをつくり込む設計とせず」という控えめな態度に好感が持てる。願わくは、成果品を提出したらこれで終わりということではなく、これからも長く関わって、樹林・樹木の行く末を見守っていくことを期待したい。

### 作品概要

作品名—— 朝霞市シンボルロード  
緑の都市軸創生のための樹林保全活用調査・計画  
所在地—— 埼玉県朝霞市大字膝折他地内  
発注—— 朝霞市  
事業目的—— 米軍基地跡地の内、約2.4haの帯状の緑地帯を対象に、「樹林地を生かしながら、学び、遊び、交流する場」となる緑の都市軸をつくり出すこと  
事業期間—— 2017年10月～2018年6月  
事業規模—— 2.4ha(800m)



①現況樹林樹種構成図 ②③基地時代の面影を残した緑の道の景  
④既存樹を活かした中央広場のデザイン ⑤既存樹（ヤマザクラ）を際立たせ場所性を強調した南口広場

### 提案3 緑の基盤整備計画

安全と次世代継承を目標とした既存樹林整備をめざし、以下の基盤整備計画を提案しました。

#### 【外来樹種の選択的伐採】

基地返還後の長い時間経過の中で、樹林内はニセアカシアなどの外来樹種が広がりつつあったため、地域本来の森の育成を目指し、外来樹種の選択的除伐計画をたてました。

#### 【森の土壌基盤整備計画】

現況植生基盤について調査分析し、これに基づいた伐採、舗装撤去、堆積腐葉土の保全など森の基盤整備計画を立案しました。



# 優 秀 賞



①緑のコーディネーター養成講座修了式 ②養成講座現地見学 ③花の仲間たち ④植物愛香会「カモミール」  
⑤大濠公園フラワーメイト ⑥わたしの木 ⑦フレンドホームでの講座 ※黄色のエプロン又はベストを着ている人が緑のコーディネーターです。

## 市民による公共空間の緑化推進 ～福岡市緑のコーディネーター～

株式会社アーバンデザインコンサルタント  
大杉哲哉・堤八恵子・棚町修一・小峯 裕  
福岡李奈・安部あすか・江上陽菜

### 緑化フェアが残したもの

「福岡市緑のコーディネーター」とは、市の施策や、地域、学校、企業等の緑化のけん引役である市民ボランティアの総称です。平成17(2005)年の「第22回全国都市緑化ふくおかフェア」の運営を支える市民ボランティアを起源とし、フェア後も、ふくおかの花・みどりのまちづくりを支援してもら

う、市長認定の資格として創設し、現在253名(1期生～9期生)が活躍しています。

### “花・みどり”をツールとしたまちづくり

緑のコーディネーターは、各自の得意なことを活かして活動しています。例えば、花好きな人を集めて花壇を作ったり、ハー

### 作品概要

作品名—— 市民による公共空間の緑化推進  
～福岡市緑のコーディネーター～  
対象地—— 福岡県福岡市  
目的—— 福岡市の一花運動のけん引役である市民ボランティア「福岡市緑のコーディネーター」を養成し、“花・みどり”で「共創のまちづくり」の推進を支援すること。  
体制—— 福岡市緑のまちづくり協会及び福岡市一人一花推進課の緑化推進を支援。当社は、緑のコーディネーターの養成、スキルアップ等の人材育成プログラムの企画、運営等を担当。  
体制—— 福岡市緑のまちづくり協会  
体制—— 平成23(2011)年5月～令和2(2020)年3月

### 作品評

福岡市において、市民ボランティアである「緑のコーディネーター(緑コ)」を養成し、“花・緑”で「共創のまちづくり」の推進を支援する事業に、平成16年度から長く取り組んでいる。緑コは、福岡市の緑化施策をけん引する市民ボランティアであり、253名が活躍している。福岡市が目指す「共創のまちづくり」の主体を担っている。福岡市からは、主体的に活動できるリーダーの育成、受講者の増加、緑コのスキル向上、緑化団体のメンバーの固定化や高齢化対策等、の諸課題の解決を要請されている。これらの要請に対して、解決策を提示し、それを着実に実践している。自治体にとって、実に頼もしい存在である。  
応募文書がきわめて読みやすいことに好感を持った。ボランティア育成という業務において、市民にとってわかりやすく、読みやすい文書づくりを心がけていることがうかがえる。市民を共鳴させ、市民を動かすことのコツを熟知している者の為せる技であろう。



⑧ふくおか花と緑の連絡会 ⑨早良病院花壇作成 ⑩舞鶴公園フラワーボランティア ⑪弥永西公民館プリザーブドフラワーアレンジ ⑫早良公民館寄せ植え  
⑬一人一花華しるべ ⑭一人一花ハッスル隊 ⑮一人一花サミット「エコ鉢」

バリウムやスワッグの講座を行ったり、里山保全活動をしたりと、福岡のみどりを守り、増やし、市民の皆さんにみどりを伝え、仲間とともにみどりを学ぶ活動をしています。

福岡市は平成30(2018)年から「一人一花運動」を始めました。これは、市民・企業・行政一人ひとりが、公園や歩道、会社、自宅など、市のありとあらゆる場所での花づくりを通じ

て、人のつながりや心を豊かにし、まちの魅力や価値を高める取り組みです。市が目指す「共創のまちづくり」を市民が主体となって形作っており、その中心を緑のコーディネーターが担っています。



# JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE

株式会社 三菱地所設計

永田康明・西垣和真・植田直樹・塚本敦彦・朱豊・朴成洙・小林はるか・森本順子

JAPAN SPORT OLYMPIC SQUAREは60以上のスポーツ関連団体のオフィスが集積する日本スポーツ界の総本山となる施設である。1、2Fには「日本オリンピックミュージアム」が整備され、「スポーツクラスター」の中核となる施設である。

神宮外苑地区が、東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京2020）に向け新たなスポーツクラスターとし

て劇的に変化中、受け継がれて来た歴史性や同時期に進行した周辺計画との関係性を読み解き、神宮外苑地区の都市景観や人々のアクティビティの結節点・中核となるランドスケープを目指した。

敷地北側の広場は、日本オリンピックミュージアムの「MONUMENT AREA」として、「オリンピックムーブメントを体験し、レガシーを継承する広場」としてミュージアムと連携した広場空間が整備された。

東京2020も閉会を迎え、新たなオリンピックレガシーが刻まれた神宮外苑地区において、今後も多くの人に「オリンピックムーブメント、レガシー」を伝える空間としてあり続ける。

## 作品概要

作品名—— JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE  
 所在地—— 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号  
 建築主—— 公益財団法人日本スポーツ協会  
 公益財団法人日本オリンピック委員会  
 設計監理—— 株式会社三菱地所設計  
 設計協力—— 大林ランドスケープ設計事務所(大林万里江)  
 施工—— 株式会社大林組、大林道路株式会社(外構工事)  
 株式会社日比谷アメニス(造園工事)  
 設計期間—— 2015年2月～2017年7月  
 施工期間—— 2017年7月～2019年4月  
 2019年12月～2020年2月(一部広場整備)  
 規模—— 敷地面積 約3,317m<sup>2</sup>  
 主要施設—— 事務所、ミュージアム、駐車場

## 作品評

60以上のスポーツ関連団体のオフィスが集積する日本スポーツ界の総本山であり、1階は「日本オリンピックミュージアム」が入居するビルの外構が対象である。歩道からもミュージアムの内部が見え隠れする施設に対し、大きく空間を開き、並木状の植栽と低木で修景している。北側の広場も、ゆるくカーブを描きながら、狭い空間を広がりが感じられる広場へと演出している。

ビル自体がシンボリックな施設であることに対し、屋外空間全体では控えめな演出が施されている。オリンピックレガシーをどう表現するかに意識が捉えがちだが、様々なシンボル施設も控えて、収まるべき場所に収まり、洗礼された空間となっている点は、上手い手法だ。

説明資料は写真や断面図、考え方をまとめた各種平面図と解りやすく、丁寧に取まらされている。ただし、強烈に訴えかけるインパクトに乏しく、現地の印象と同様に控えめな感じが見えた。ただし、本作品はオリンピック開催年の作品であり、そのレガシーであることから、特別賞の受賞となった。



- ① 近隣住民に親しまれる人工芝の広場
- ② オリンピックバリューを彫り込んだベンチ
- ③ スタジアム通り沿道の歩道に刻まれた歴代オリンピックのレガシー
- ④ 偉大なオリンピックの記録を体感するアクセント舗装と岸記念体育会館から移植したオリーブ
- ⑤ 平面図

## 「景観のリレー・記憶のリレー」

スタジアム通り沿道には隣接街区とリレーするシラカシ並木、敷地西側には街区をまたいで連続する緑の回廊が整備され、隣接街区と一体に新たな神宮外苑地区の緑のネットワークを創出した。また、敷地内には前会館の岸記念体育会館竣工時（1964年）に常陸宮殿下により植樹された樹齢50年を超えるオリーブの移植、岸清一胸像が移設された。

園路やファニチャーは、トーチを繋げるように「重なり」、「つながる」スポーツの躍動感を感じる拡張性を持ったデザインとし、将来的に公園整備が予定される西側隣接敷地などへ今後も拡張し、リレーする余地を持った計画としている。

## 「オリンピックムーブメントの体験」

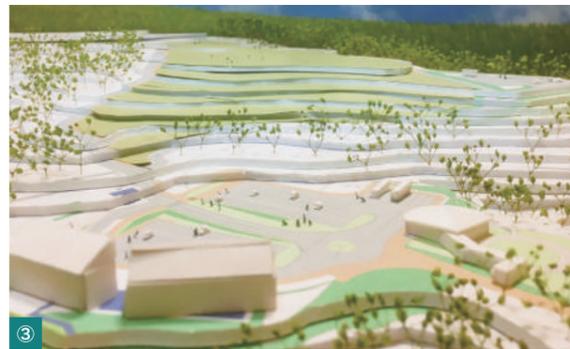
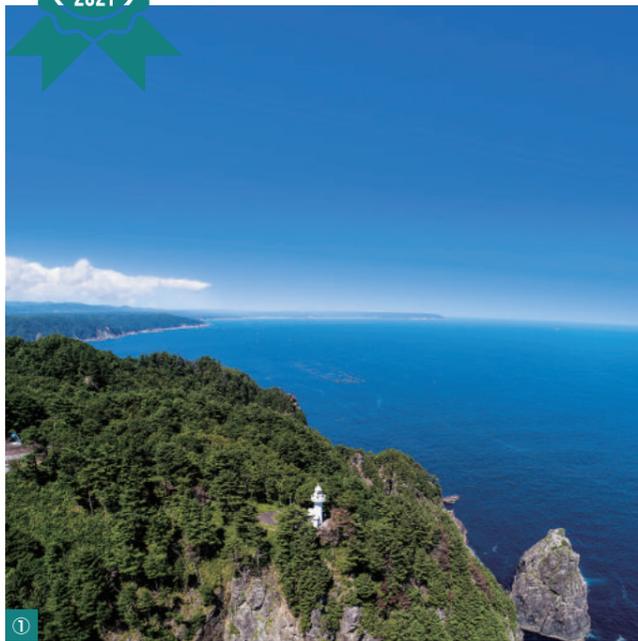
### 「オリンピックレガシーの継承」

「MONUMENT AREA」にはオリンピックレガシー、ムーブメントを「見る、知る、触れる」様々なモニュメントが散りばめられている。来訪者は四季の変化に富んだ植栽に囲まれる人工芝の広場に座り、寝ころび、寛ぎ、舗装に刻み込まれた日本初の金メダリストの偉大な三段跳びの記録などを体感する。

また、「MONUMENT AREA」のランドスケープと一体に配置検討されたオリンピックシンボルや聖火台のモニュメント、オリンピックにまつわる偉人像が別途工事により設置された。



# 奨励賞



①対象地周辺の様子 ②コンテンツの一つ、普代「きららみ」のビーチヨガ ③共通理解促進のための対象地周辺模型 ④見晴らしテラスの計画断面

## 黒崎園地利用拠点計画策定支援業務

株式会社総合設計研究所 東北事務所  
大瀧英知・大石佳奈

黒崎園地は岩手県下閉伊郡普代村の沿岸部に位置する三陸復興国立公園の一部で、高さ100メートルを超える海成段丘面からは直前に広がる雄大な段丘崖の連続と海の青、空の青を楽しむことができる。

本業務では国立公園を取り巻く景観悪化の課題と変化する旅行ニーズへの対応の必要性などを背景に、景観形成とマネジメントの両面に及ぶ総合的な活用計画の策定を支援した。

村の人口が約2,500人と少ないことから観光と村の持続性とのつながりを重要視し、協議会やワークショップでは村民や村内事業者の意見を積極的に募った。ハード整備では引き算の景観形成を軸に利用拠点である「くろさき荘」周辺および室内外の上質化計画を立案、ソフト面では着地型観光組織（地域発着の観光商品を開発する組織）の形成に向けた取り組みをすすめることを策定した。

### 主な取り組み

協議会、住民ワークショップ、サウンディング調査を行った上で、観光客や地域の方が持続可能なものとして実行可能な利用拠点計画の策定を行った。



### 作品概要

業務名—— 黒崎園地利用拠点計画策定支援業務  
発注—— 岩手県普代村(環境省)  
事業期間—— 2020年4月～2021年3月  
対象地—— 岩手県下閉伊郡普代村黒崎園地  
規模—— 約5ha  
主要施設—— 国民宿舎くろさき荘・黒崎園地  
事業目的—— 国立公園である黒崎園地およびその利用拠点である国民宿舎くろさき荘の利便性と満足度の向上を図ること。  
協働者等—— 東京大学森林風致計画学研究室(山本清龍准教授)・株式会社青の国ふだい・NPO法人みちのくトレイルクラブ・クラブツーリズム株式会社・普代村観光協会・普代村商工会青年部・有限会社カネシメ水産・日本財団 海と灯台プロジェクト・公益財団法人さんりく基金 三陸DMOセンター・(有)ノルムナルオフィス(デザイン協力)

### 作品表

普代村は岩手県北部の三陸海岸に面する海と山との自然に恵まれた自治体である。「国民宿舎くろさき荘」を拠点として国立公園黒崎園地の景観形成を計画し、さらに普代村の観光振興マネジメントを計画した。国立公園の経営手法の検討に取り組んだ仕事である。業務のプロセスは、現地調査に基づく実態把握、民間事業者へのサウンディング調査、先進事例調査、観光地域団体・大学有識者・DMO・民間事業者・村担当者による協議会を踏まえて提言を取りまとめ、さらにこの提言をもとに管理運営の可能性を探るためのサウンディング調査を経て、「黒崎園地利用拠点計画」を策定した。  
地域資源を丹念に掘り起こして、空間を整備し、観光資源を磨きあげてブランド化する方策と、推進する仕組みを導いた力作である。  
計画を作ったことで本業務は完了した。ご苦労をねぎらいたい。黒崎園地の利用促進事業は再スタートしたが、今後は、事業の実現に向けてこれからも長くかかわっていただきたい。陰ながら応援したいと思う。

## CLA賞の趣旨と募集・選考のあらまし

CLA賞選考委員長 阿部 伸太

CLA賞は、会員の優れた作品や業務を顕彰し、協会内部だけでなく広く社会に紹介することを目的として設けられたもので、ランドスケープ分野のプロフェッショナルが行った仕事をプロが評価し、優秀なものを表彰するというシステムに特徴があります。

同時に、応募者は自己が実施した業務の成果について、改めて応募資料という形に取りまとめるため、個々の業務の再チェック、すなわち品質保証の一翼を担うという面からも、機能するものでもあり、また、今後の業務展開につなげることが期待できると考えます。

応募作品の募集は、例年に従い、4月上旬から始め、7月末を期限として行いました。その結果「設計」「調査・計画」「マネジメント」という3分野で、9社から15作品の応募となり、積極的な応募を頂き、かなり増えたという結果でした。応募くださった皆様には厚く御礼申し上げるとともに、会員各社ならびに技術者皆様のより一層の研鑽を期待する次第です。

今年度応募された作品は、いずれも力作ぞろい、またCOVID-19の状況下において多くの応募があったことは感謝いたします。その内容を見ると都心におけるビル開発におけるオープンスペースや、公園の改修に真摯に、そして丁寧に取り組まれたものから、復興住宅地やキャンパスのオープンスペースの設計など、ランドスケープの分野が確実に拡大していることを実感できるものとなりました。各委員は、事前に配布された応募作品の資料に対して募集要綱に示された「設計」「調査・計画」「マネジメント」部門毎に、それぞれ5つの視点から評価を付け、選考会当日に集計しました。

選考会では、こうした集計結果を参考として、改めて各作品毎に賞を付すにふさわしい作品か否かについて討議し、最優秀賞1作品、優秀賞6作品、特別賞1作品、奨励賞1作品を選出いたしました。最優秀賞の作品は、ランドスケープ作品として秀逸で、選考委員全員の一致した意見で決まりました。特別賞は、オリンピック開催年という時代性を反映した作品として特別賞となりました。また、奨励賞は、地域おこしに丁寧に取り組まれた作品で、今後共こうした方向性の業務拡大を支援するという意味から奨励賞となりました。

年々、提出されるプレゼンテーション資料の質、特に「調査・計画」「マネジメント」部門においても向上しており、今年もこの傾向は顕著に確認されました。社会や他分野の人々に対して、ランドスケープの関わりによるプロジェクトへの影響の点でのアピールが強く求められ、業務の中でランドスケープが果たした役割が明瞭に示されたものが高く評価されました。この

ことは、プロジェクトの初めの段階に造園家に関わることの重要性を社会へ発信すると共に業界としての再認識にもつながることと期待します。また、今後はランドスケープが関わったことによる運営の活性化や地域おこしなど、マネジメント分野に対する期待も議論されました。

選から漏れた作品も、ランドスケープの技術を駆使して、社会的課題を解決する、そうした姿勢が表れていました。差が出た部分は、大半がプレゼンテーション部分です。やはり、コンセプトやプロセスに係わる部分が、丁寧に、かつ解りやすく表現されたものが優位に評価されました。

社会に対してランドスケープという職能を如何にアピールするか？ その答えは、こうした良質なランドスケープ作品を世に送り出し続けることだと考えます。CLA賞はそうした意味からも、単なる顕彰制度にとどまらず、ランドスケープコンサルタントの技術力向上に繋がるとともに、社会へアピールする材料として活用されることも含め、会員企業や技術者の皆様の糧になることを願って、選考結果のご報告といたします。

### 作品の応募と選考結果

部門	応募	最優秀賞	優秀賞	特別賞	奨励賞
設計	9点	1点	3点	1点	該当なし
調査・計画	4点	該当なし	2点	該当なし	該当なし
マネジメント	2点	該当なし	1点	該当なし	1点
計	15点	1点	6点	1点	1点

### 選考委員

委員長	阿部 伸太	東京農業大学准教授
副委員長	内藤 英四郎	CLA 理事
委員	五十嵐 康之	国土交通省都市局 公園緑地・景観課課長
委員	石井 ちはる	CLA 技術委員長
委員	卯之原 昇	(一社)日本造園建設業協会 資格制度委員長
委員	木下 剛	千葉大学大学院准教授
委員	篠沢 健太	工学院大学教授
委員	浦田 啓充	(一社)日本公園緑地協会常務理事
委員	塚原 道夫	CLA 広報委員長
委員	諸井 泰司	全国1級造園施工管理技士の会(一造会) 技術部会長